

表現と鑑賞の一体化を目指した音楽指導法の提案

—合科的指導を視点として—

Proposal for a Music Teaching Method Aimed at Integrating Expression and Appreciation Activities: From the Perspective of Integrated-Subject Instruction

白石 朝子 (Asako SHIRAIISHI)

1. はじめに

2017年告示の小学校学習指導要領では、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の実現に向けてスタートカリキュラムの一層の充実が期待された。この背景には幼児期から学童期への移行における、いわゆる「小1プロブレム」の問題がある。¹⁾「小学校学習指導要領解説生活編」では、「改訂の趣旨（1）改善の基本方針」の中で、「小1プロブレムなど、学校生活への適応を図ることが難しい児童の実態があることを受け、幼児教育と小学校教育との具体的な連携を図ること。」とし、「改善の具体的事項（オ）」では「幼児教育から小学校教育への円滑な接続を図る観点から、入学当初をはじめとして、生活科が中心的な役割を担いつつ、他教科の内容と合わせて生活科を核とした単元を構成したり、他教科においても、生活科と関連する内容を取り扱ったりする合科的・関連的な指導の一層の充実を図る。」と記述されている。そして、「生活科改訂の要点（2）内容及び内容の取扱いの改善⑤幼児教育及び他教科との接続」において、「幼児教育との接続の観点から、幼児と触れ合うなどの交流活動や他教科との関連を図る指導は引き続き重要であり、特に学校生活への適応が図られるよう、合科的な指導を行うなどの工夫により第1学年入学当初のカリキュラムをスタートカリキュラムとして改善することとした。」と示した。合科的・関連的な指導内容については、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」で「（3）国語科、音楽科、図画工作科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること。」と示されている。それに対応して、生活科と関連する教科として挙げられている音楽科では、「（4）低学年においては、生活科などとの関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に第1学年においては、幼稚園教育における表現に関する内容などとの関連を考慮すること。」と記されている。

では、音楽科の授業において1)「生活科などとの関連を積極的に図り、指導の効果を高める」ために、そして、2)「幼稚園教育における表現に関する内容などとの関連を考慮」して指導を行うためには、具体的にどのような方法が挙げられるのだろうか。著者は、これまで、2)「幼稚園教育における表現に関する内容など」に関連した円滑な保幼

小接続を意識した音楽表現の指導法について、モノや楽器を使用した音を表現する方法「音遊び」の可能性を探ることを目的とし、「音遊び」が小学校における児童の「音楽」の授業へどのように生かされていくのかについて検討した。この背景には、小学校学習指導要領の改訂で、「どのように学ぶか」という学びの過程を重視したことが挙げられる。音楽科における知識の取得は、音楽の仕組みや理論的な学びである〔共通事項〕の理解のみを指すのではない。音楽を体感したり知覚したりすることによって得られる経験が、いかに知識に結びつき体現できるかが大切であるといえる。

これまでも実際に音楽活動を行うことで、幼児教育と小学校教育の接続の観点から指導法に関する研究が行われてきた。例えば岡林ら（2017）は、絵本を用いた「表現遊び」から「音楽づくり」へと移行する音楽活動を提案している。また、坪井（2021）は、小学校入学時に求められる資質・能力と、どのような過程において接続していくかを音楽科の観点から分析・考察を行い、保幼小接続においては「音楽を体感できる」体験を積み重ねることが重要であると結論付けた。さらに、平出（2022）は、幼小接続期の音楽カリキュラム作成および実践によって音楽を通した子どもたちの自然な関わり合いについて報告している。これらは幼小の円滑な接続を目指す「スタートカリキュラム」と関連した内容としても捉えられるが、さらに生活科を中心とした具体的な合科的指導を検討する必要があるだろう。一方で、生活科と音楽科の関連を視点とした研究としては、山崎（2018）が先行研究や実践報告をもとに、生活科の観察が音楽づくりに、また、生活科での五感を働かせた体験が音楽の鑑賞学習における議論に役立つことを報告している。

本稿では、これらの先行研究を踏まえたうえで、小学校音楽科の授業において、1）「生活科などとの関連を図り、指導の効果を高める」ために、合科的指導を視点として、1年生の音楽科導入教材について分析する。生活科の指導内容が「音楽科との関連では、例えば、身近な自然を観察したり身の回りのものを使って遊んだりする体験が、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて気付くこと、音遊びを通して音楽づくりの発想を得ることなどに発展する可能性をもっている。」ことを踏まえ、表現と鑑賞の一体化を目指した音楽指導法を提案したい。

2. 幼小で求められる学びの姿

2-1. 幼児期の遊びを通した学び

入学前の子どもの姿に目を向けると、2017年告示の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として「10の姿」²⁾が明確化されており、幼児教育が小学校以降の生活や学習の基盤となるとされている。幼児期は、幼稚園教育要領等が示す「5領域」（1.健康 2.人間関係 3.環境 4.言葉 5.表現）のねらいと内容に基づいた遊びが展開される。幼児は日々の「生活や遊びの中で感性を働かせながら」様々なことを行う。その際、「よさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたり」する。そのうえで、できるようになったことなど

を使いながら試したり、いろいろな方法を工夫したりすることなどを通じて、「楽しさを体いっぱいを感じながら試行錯誤し、仲間と協同して工夫し発見する楽しさを見いだしていく」のである。

その際、保育者は子どもの心身の発達や子どもを取り巻く環境を理解したうえで、子どもの気持ちから生まれる主体的表現に気づき、子どもの遊びを豊かに展開することが重要である。特に5領域「表現」では、子どもの表現が、表出から始まり主体的な表現となっていくこと、また、表現はある特定の表現活動によるものではなく、日々の遊びや生活の中にあると捉えることが大切な視点となるだろう。いわゆる特別な音楽活動ではなく、生活や遊びのなかで歌を口ずさんだり、様々な自然の音や生活の音を聴いたりすること、また、身近な楽器やモノを用いて音を作りだして遊ぶといった活動が小学校以降の音楽科における「自覚的な学び」へと繋がる。これらは小学校入学当初、幼児期における遊びを通じた総合的な学びから出発する「スタートカリキュラム」に相当する。「他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながらより自覚的な学びに向かうことが可能となるようにする」³⁾ことは、小学生となった子どもたちの成長が幼児期における遊びや生活の延長線上にあることを示している。

2-2. 低学年の「楽しさ」や「気づき」を伴った音楽の学び

入学後の子どもの姿に目を向けると、小学校学習指導要領音楽科の教科目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成すること」であり、「A表現」と「B鑑賞」の2領域から構成され、[共通事項]との関連を図って指導が行われる。

低学年の指導目標は、(1)「知識及び技能」の習得に関する目標、(2)「思考力、判断力、表現力等」の育成に関する目標、(3)「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関する目標として、以下の通り示されている。

(1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて気付くとともに、音楽表現を楽しむために必要な歌唱、器楽、音楽づくりの技能を身に付けるようにする。

(2) 音楽表現を考えて表現に対する思いをもつことや、曲や演奏の楽しさを見いだしながら音楽を味わって聴くことができるようにする。

(3) 楽しく音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、身の回りの様々な音楽に親しむとともに、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養う。

これらは、「10の姿(10)豊かな感性と表現」の「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意

欲をもつようになる。」という子どもの姿から、低学年の子どもたちの発達を考慮しながら「楽しさ」や「気づき」を伴った音楽の学びへと移行するよう求められている。

3. 1年生の音楽導入教材における表現と鑑賞指導

3-1. 歌唱表現と生活科の関わり

1年生音楽科授業の実際について教科書の指導計画をもとに検討したい。小学校音楽教科書『小学音楽 おんがくのおくりもの1』（教育出版）の年間指導計画から7時間扱いの導入部分については、表1のように提示されている。

表1 令和2年度版『小学音楽 おんがくのおくりもの1』年間指導計画（案）より導入部分

題材の目標等	学習のめあて	教材 ◆共通教材 ◎鑑賞
(1) 曲想と旋律や拍など音楽の構造との関わり、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりに気付くとともに、思い合った表現をするために必要な、範唱を聴いて歌う技能を身に付ける。	どんなうたが あるかな	ちょうちょう/ちゅうりっぷ/おつかいありさん/こりのうた/やぎさんゆうびん/ばすごっこ/かえるのがっしょう/こいのぼり/めだかのがっこう/いぬのおまわりさん
	おんがくに あわせて あるこう	◎ゴーアンドストップ
(2) 拍、速度、旋律、リズム、強弱、変化などを聴き取り、それらの動きが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いもったり、曲の楽しさを見だして聴いたりする。	うたに あわせてかもつれっしやになってあそぼう	かもつれっしや
	おんがくに あわせて からだを うごかそう	◎サンダーバード/◎ピンク・パンサーのテーマ/◎どうけしのギャロップ/◎なみをこえて/◎ぞう
(3) 歌ったり、音楽に合わせて体などを動かしたりすることに興味をもち、音楽活動を楽しみながら、主体的・協動的に学習活動に取り組み、小学校生活の始まりを明るく潤いのあるものにしてようとする態度を養う。	うたに あわせておはな になって あそぼう	◆ひらいたひらいた
	わらべうたで あそぼう	わらべうた
	うたに あわせて みぶりで あそぼう	◆かたつむり

まず、「どんなうたがあるかな」では、〈ちょうちょう〉（ドイツ民謡）や〈ちゅうりっぷ〉（作詞：近藤宮子／作曲：井上武士）など教科書の挿絵（図1）に隠されている歌をみつけて歌う活動を行う。この活動は、教員にとっても子どもたちがどの程度歌と関わってきたのかを知る機会になり、今後の教材決定においても重要な機会となる。また提示されている曲以外にも、太陽の挿絵から保育園や幼稚園で歌った朝の歌を思い出す子どもや、バスの絵を見て〈ばすごっこ〉（作詞：香山美子／作曲：湯山昭）ではなく、ふれあい遊びでよく用いられる〈バスに乗って〉（作詞・作曲：谷口國博）を挙げる子どももいるだろう。これらは、「曲を全て覚え、歌えるようにする学習ではなく、まずは挿絵に隠されている歌を見つけてみんなで歌っていくような楽しい場をつくり、交流しながら表現を楽しめるように」⁴⁾ 配慮する必要がある。

そして、幼児期に生活や遊びのなかで口ずさんできた歌が、生活科1年生単元「さかせたいな わたしのはな」「いきものとなかよし」⁵⁾ における身近な自然観察、例えばチューリップや蓮華の花とい



図1 『小学音楽 おんがくのおくりもの1』（教育出版）p.2-3

った植物、蟻やカエル、メダカなど生き物との関わりと重なり、これらの歌唱表現につながることを期待する。

3-2. 鑑賞における体を動かす活動とクラスで楽しむ遊び

次に、「おんがくにあわせてあるこう」では、鑑賞教材として〈ゴーアンドストップ〉（作曲：高倉弘光）が取り上げられる。指導の際には「聴くことの大切さ」を伝え、「音楽と一体となって動いてみる」ことを楽しみながら行うことが求められる。これは学習者が体の動きを通して様々な音楽的要素（音楽科の〔共通事項〕）などを感じ取り、より本質的な音楽の学びに生かすことができるリトミックの導入が意識されているだろう。例えば、音楽が止まったら動きを止める、拍にあわせて手を打つ、拍子を感じて動きを変える、長調と短調を聴き分けて方向転換して歩く、音楽の速さを応じて動きの速度を変化させるなど、今後の学習に向けた導入教材として様々な工夫を行うことが考えられる。

そして、〈かもつれっしゃ〉（作詞：山川啓介／作曲：若松正司）では、曲に合わせて歌いながら、じゃんけんを用いたルール遊びを行う。その際、ト레인ホイッスルを用いて音の表現を楽しみ貨物列車になりきって遊んだり、曲を聴いて思い浮かべる場面を描いたりして、表現をイメージし共有することもできるだろう。また、音の高さや強弱、速さを変化させることによって、異なった表現に目を向けることもできる。この曲は、生活科の単元「あたらしいいちねんせい」におけるクラスの遊びにも活用できる。

さらに、「おんがくにあわせてからだをうごかさう」（図 2）では、鑑賞教材として5曲を取り上げる。表2で示したように、2拍子、3拍子、4拍子の曲を用いて、ギャロップ、ワルツ、マーチといった音楽の特徴をよく感じとり、身体を動かしながら聴く活動を行う。

これらの曲は、1年生の鑑賞教材として教科書に掲載されているワルツ〈おどるこねこ〉（作曲：アンダーソン）⁶⁾やマーチ〈こうしんきょく〉（作曲：チャイコフスキー）⁷⁾、〈おもちゃのへいたい〉（作曲：イエッセル）⁸⁾の学習につなげていくことができる。そのため、「楽しく」感じたままに身体を動かすのはもちろんであるが、2拍子と4拍子の拍感の違いや、3拍子の優雅さ、また、速度によって拍感が変わること等を踏まえたステップで、子どもたちと表現を楽しむことが望ましい。

また、これらは管弦楽の作品であるため、各楽器の色彩豊かな表現を



図2 『小学音楽 おんがくのおくりもの1』（教育出版）p.8-9

表2 「おんがくにあわせてからだをうごかさう」掲載曲

	曲名	作曲者	拍子
1	サンダーバードのテーマ	Barry Gray (1908-1984)	4拍子
2	道化師のギャロップ	Dmitri Kabalevsky (1904-1987)	2拍子
3	ピンク・パンサーのテーマ	Henry Mancini (1924-1994)	2拍子
4	なみをこえて	Juventino Rosas(1868-1894)	3拍子
5	ぞう	Saint-Saëns(1835-1921)	3拍子

聴くこともできる。例えば、〈サンダーバード〉では金管楽器とスネアドラムの掛け合い、〈道化師のギャロップ〉では、木管楽器や弦楽器の歯切れ良く温もりのある音、〈ピンクパンサーのテーマ〉はサクソフォンの怪しげな音色や曲調を楽しむことができる。

3-3. わらべうたの音楽的要素と合科的指導

続いて、共通教材〈ひらいたひらいた〉を始め、わらべうたの取り組みについて考察する。わらべうたは身体性を伴った遊び歌であり、日本語と旋律との関係性を自然に感じることができる。5領域「環境」において「(4)文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること」⁹⁾という記載が示すように、わらべうたは、子どもの日常生活の遊びの中で創造、継承されてきた日本の伝統文化でもある。一方で、乳幼児期の関わり合いでのわらべうたは重要な意味をもち、白石・斎藤(2021)が指摘しているように「母国語の抑揚やリズムで語りかけられる乳児期を過ごした子どもは、その抑揚やリズムを内部に溜め込み、発声するようになる。うたうような、話すような表現や、わらべうたを大人と合わせて歌おうとする子どもの意志が、まさにその時期の音楽表現」でもあることを把握したうえで、小学校でも指導を行うことが求められる。

例えば、「みなさん」「はあい」というやりとりや、「はいどうぞ」「ありがとう」という生活の中のやりとりにおいても、わらべうたの長二度の音程を基本とした二音歌によって図3のように示すことができる。



図3 教員と子どもとのやりとりの例

「わらべうたであそぼう」に掲載されている〈おちゃらか〉と〈なべなべ〉は、どちらも二音歌に一音加えた三音で構成されている遊び歌である。音楽的要素を遊びから取り出して意識化させることも可能であり、例えば、拍やリズム打ち、音の上がり下がり身を振りて表すこともできる。しかし、これらに取り組む際には、教員が教材としてのわらべうたについて、「大人とのやり取りや遊びの中で培われる信頼関係、子ども同士の遊びの中で生まれる他児との関係性、わらべうたの中にあることばと現実の物との結びつき、子どもが遊びの中で巡らせるイメージ、日本語の抑揚やリズムで語りかけるやさしい響き」¹⁰⁾をもっていることを認識することが大切であろう。これは、生活科における個から集団へとつなげていく教育にも共通するといえる。〈ゆうびんやさん〉〈あんたがたどこさ〉〈おおな

みこなみ)などのわらべうたは、ボールや縄跳びを用いた遊びとして体育科の指導法とも繋がっている。

わらべうたは、小島(2010)が述べているように、子どもたちに(1)意欲を育てる(2)伝統音楽に対する感受性を育てる(3)創造性を育てる(4)社会性を育てるという4つの効果があり¹¹⁾、対話的な学習を通して音楽を学ぶことの楽しさが実感できる。教員は、わらべうたが乳幼児期の語りかけや歌いかけから始まり、個のやりとりから集団の遊びへとつながっていくことを理解したうえで、指導する必要があるだろう。

4. まとめ

本稿では、1年生の音楽導入教材における表現と鑑賞を一体化した指導法について検討した。幼児期は体験活動が中心の時期であり、子どもたちは、5領域に示されるように周りの人やモノ、自然などの環境に対して、五感を働かせて全身で感じている。音楽科の授業においても、その延長線上にある子どもの姿を理解し、様々な活動を通じて感じたことや考えたことを表現する場をどのように提供するのかが、幼児教育との連携の観点から工夫することが望まれたろう。特に導入教材においては、表現と鑑賞の活動が一体となり、子どもたち同士で楽しく交流しながら、身体を動かして学ぶことが大切であるといえる。生活科において大切にされる体験学習は、音楽科の授業における「気付き」や「発想」に発展するだろう。そのために、「A表現」と「B鑑賞」の教材を工夫して用い、授業展開することが必要である。今後は、導入教材だけでなく、低学年の音楽科指導法について合科的指導の視点から授業を組み立てる工夫を考えていきたい。

注

- 1)「教育行政においては、2000年3月、当時の文部省から研究委託された国立教育研究所(現国立教育政策研究所)が、『学級経営をめぐる問題の現状とその対応』という最終報告書の中で、はじめて『小1プロブレム』を『小1問題』という名称で取り上げたことにより、『小1プロブレム』の認知は一気に世間に広がった。」(新保：2010, p.7-12)
- 2)「10の姿」の10項目は、(1)健康な心と体、(2)自立心、(3)協同性、(4)道徳性・規範意識の芽生え、(5)社会生活と関わり、(6)思考力の芽生え、(7)自然との関わり・生命尊重、(8)量・図形、文字等への関心・感覚、(9)言葉による伝え合い、(10)豊かな感性と表現である。
- 3)「第四章指導計画の作成と内容の取扱い」『小学校学習指導要領生活編』(平成29年告示)
- 4)『教師用指導書 小学音楽 おんがくののおくりもの1研究編』(教育出版, p. 30)
- 5)『小学校生活 せいかつ 上』光村図書出版
- 6)題材「きょくのながれ」『小学音楽おんがくののおくりもの1』(p. 48)教材として、ル

- ロイ・アンダーソン (Leroy Anderson 1908-1975) 〈踊る子猫〉が取り上げられる。
- 7) 題材「いいおとみつけて」『小学音楽おんがくのおくりもの1』(p. 45) 教材として、チャイコフスキー (Tchaikovsky 1840-1943) 〈行進曲〉《くるみ割り人形》が取り上げられる。
- 8) 題材「みんなであわせて」『小学音楽おんがくのおくりもの1』(p. 57) 教材として、イエッセル (Leon Jessel 1871-1942) 〈おもちゃの兵隊の観兵式〉が取り上げられる。
- 9) 「第2章ねらい及び内容 環境 3 内容の取扱い」『幼稚園教育要領』(平成 29 年告示)
- 10) 白石・斎藤 (2021 : p. 26)
- 11) 小島 (2010 : p. 26-30)

引用・参考文献

- 新井恵美 (2018) 「生活科における音楽の関わりについて —小学校教科「生活」の授業実践を通して—」『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』宇都宮大学教育学部, 第 4 号, pp.287-29.
- 安藤江里 (2019) 「保幼小接続期における教育活動としてのわらべうた遊びの意義 : 保育者と小学校教諭の相互理解を通して」『地域総合研究』松本大学地域総合研究センター, 第 20 号, pp. 85-104.
- 石出和也 (2016) 「遊びを導入した音楽学習活動: 幼小接続への予備的研究」『北海道教育大学紀要 教育科学編』北海道教育大学, 第 66 号, pp.181-190.
- 今井和子 (2014) 『遊びこそ豊かな学び 乳幼児期に育つ感動する心と考え・表現する力』ひとなる書房.
- 岡林典子, 難波正明, 山崎菜央, 深澤素子, 松田幸恵, 藤井香菜子, 高橋香佳, 大瀧周子 (2017) 「幼小をつなぐ音楽活動の可能性 (4) : 絵本を用いた『表現遊び』から『音楽づくり』へ」『京都女子大学発達教育学部紀要』京都女子大学, 第 13 号, pp.73-83.
- 小島律子 (2010) 『学校における「わらべうた」教育の再創造—理論と実践—』黎明書房.
- 佐藤雅子, 加納誠司 (2022) 「幼児教育の育ちを生かした小学校低学年教育の在り方に関する研究—子どもの個を伸ばす幼小接続を目指して—」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』愛知教育大学, 第 7 号, pp.103-110.
- 白石昌子, 斎藤美智子 (2021) 「保育所におけるわらべうたの意義 : S 保育園での実践を通して」『福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要』福島大学, 第 3 号, pp. 19-28.
- 新山王政和, 加藤幸子, 吉松頼美, 太田理恵, 石川翼, 井垣智恵 (2013) 「表現と鑑賞を一体化させ音や音楽を聴く力の育成をめざした授業実践-2—音楽構成要素を知覚・分析させ表現へ結びつけさせた試み—」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』国立大学法人愛知教育大学, 第 3 号, pp.87-96.
- 菅道子 (2004) 「生活科における音楽の教材開発の可能性—歴史に見る音楽の合科・統合の

- カリキュラム編成の試み一」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』第 14 号，pp169-177.
- 高倉弘光（2014）「小学校低学年における動きを伴った鑑賞授業」『音楽教育実践ジャーナル』第 12 巻 1 号,pp. 75-78.
- 坪井真里子（2021）「小学校第 1 学年音楽科教材から読み解く、幼小接続の一考察」『名古屋女子大学紀要人文・社会編』名古屋女子大学，第 67 号，107-120.
- 新保真紀子（2010）「小 1 プロブレムの予防とスタートカリキュラム」明治図書.
- 平出久美子（2022）「幼小接続期における音楽科のあり方」『学校音楽教育実践論集』日本学校音楽教育実践学会，第 5 号，pp.62-63.
- 山崎浩隆（2018）「生活科と音楽科の関連に関する一考察」『熊本大学教育実践研究』熊本大学教育学部附属教育実践総合センター，第 35 号，pp. 61-66.